

例 言

1. 本書は、昭和58年度に館林市内の三野谷地区から始まり、平成元年度の郷谷・館林地区まで行われた野草調査の成果（『館林市の野草 第1集～第7集』館林市教育委員会発行）に、その後の追跡調査、樹木調査の結果を加えまとめたものである。
2. 本書の編集は、館林市教育委員会文化振興課が行った。
3. 本文は、上記野草調査の執筆者松澤篤郎、島野好次、青木雅夫が執筆し、分担については担当項目の最後に記載した。なお、執筆者の略歴については本文末に掲載した。
4. 本書に掲載された図版、写真は各執筆者、文化振興課にて保管していたものを使用した。
5. 本書の完成までには、野草調査時から多くの市民の方々からのご協力をいただきました。感謝申し上げます。また各地区の公民館にも大変お世話になりました。
6. 植物目録・特筆される植物等については、昭和25年（1950）の頃より館林市及び邑楽郡地方を含めて調査をすすめてきた。環境の変化により絶滅したもの、変遷していったもの等を記録して、調査地域の方々ばかりでなく、広く多くの方々に植生の現状を知っていただき、活用されることを願い、館林市・邑楽郡全地域の植物目録及び特筆される植物をあげた。

《参考》「館林市の野草」発刊状況

「館林市の野草 第1集 三野谷の野草」	昭和61年3月発行	執筆者 松澤篤郎
「 ” 第2集 六郷の野草」	昭和63年3月発行	執筆者 松澤篤郎
「 ” 第3集 渡瀬の野草」	昭和63年3月発行	執筆者 青木雅夫
「 ” 第4集 大島の野草」	平成元年3月発行	執筆者 島野好次
「 ” 第5集 赤羽の野草」	平成元年3月発行	執筆者 青木雅夫
「 ” 第6集 多々良の野草」	平成2年3月発行	執筆者 松澤篤郎
「 ” 第7集 郷谷・館林の野草」	平成2年3月発行	執筆者 島野好次

— 「館林市の植物」目次 —

口 絵

はじめに

例 言

目 次

1 館林市の概観	
地形、気候	1
植生	7
2 水辺・低湿地の植物	
(1) 茂林寺沼とその周辺	10
(2) 城沼・古城沼とその周辺	23
(3) 多々良沼とその周辺	28
(4) 谷田川沿い	30
(5) 矢場川から渡良瀬川沿い	33
3 耕作地の植物	
(1) 水田	35
(2) 畑	37
(3) 休耕地	39
4 住宅地	
(1) 市街地及び市街地周辺	44
(2) 公園の樹木	45
5 いろいろな林	
(1) 社寺林・屋敷林	47
(2) 雑木林	47
(3) 街路樹	56
6 特筆される植物	
(1) 貴重な植物	65
(2) 帰化植物	78
(3) 絶滅及び絶滅の危惧される植物	90

7 類似植物の見分け方	97
8 有用植物	
(1) 食用植物	111
(2) 薬用植物	115
9 市内の名勝・天然記念物	
(1) 名勝躑躅ヶ岡	118
(2) 茂林寺沼及び低地湿原	126
(3) 茂林寺のラカンマキ	127
(4) タテバヤシザサ自生地	128
10 市内の巨樹・古木	129
11 館林市の植物研究小史	134
12 植物目録	138
13 植物観察コース	
(1) 多々良沼周辺と松林	177
(2) 城沼周辺	178
(3) 古城沼周辺	181
(4) 茂林寺沼と野鳥の森周辺	182
14 参考文献	184
15 著者略歴	186
16 索引	187

1 館林市の概観

地形、気候

地 形

館林市は関東平野の北部、群馬県の東南部に位置し、東西15.5km、南北8.0kmの面積 60.98km²で人口約77,560人を数える。海拔は20.1mで北緯36° 14' 30" 東経 139° 32' 44"である。北を渡良瀬川、南を谷田川、西を多々良沼などではさまれた洪積台地を中心に、その周りに広がる沖積低地よりなる。

標高の差が小さいので館林の台地を意識する人は少ないだろうが、その洪積台地は本町通りを足次町方面の北から南に熊谷方面に向かって歩くと、当郷付近から緩やかに坂が登って、駅前通りと交差する付近から急に下り坂になっているのが実感できる。坂を下り終わったあたりが、鶴生田川である。そこから緩やかに再び登りに転じる。西は館林市立多々良中学校付近に長く続くアカマツ林の西に平行する多々良沼の低地帯で分断され、東は城沼で船に乗って、岸辺を見ると、東から西へ突き出している台地を見ることができる。台地は緩やかに西から東へ傾斜している。

洪積台地は長い間に流水の働きなどで木の枝状に侵食され、いくつもの谷ができた。その谷は出口を渡良瀬川や谷田川などの堆積物（自然堤防）で塞がれて、流出する水がせき止められ、そこにこの地方特有の沼ができ、湿地が発達したのである。城沼、蛇沼、茂林寺沼、近藤沼など岸辺に



図1 館林市の位置図